

# 猫蓑通信

第 86号  
平成 24年  
(2012年)  
1月 15日発行  
(年 4回発行)



## 二十韻と正式俳諧

青木秀樹

新年おめでとうございます。

今年は何より前向きな年にしたいと願っている方が多いのではないだろうか。

今年、東明雅先生にご報告し喜んでいただけることが二件ある。まずは国民文化祭の募吟形式が「二十韻」に決まったこと、もうひとつは亀戸天神社の奉納「正式俳諧」が本殿で興行されることである。

第二十七回国民文化祭は開催地決定が遅れていたが、五年前に開催したばかりの徳島県に決まった。極めて異例のことだが、阿波踊り、藍染め、阿波人形芝居、第九合唱の四事業を正式開催種目とすること、県内自治体に事業を振り分けたいという条件下で徳島県が開催を引き受け、その他若干種目を公募することになった。今回は連句協会が文化庁に実施計画を添えて申請書を出し、開催が決定した。

従って、連句大会は主として徳島県連句協会が実施主体となり、徳島市は関与しない。徳島県連句協会は少ない予算で開催するに当たって

「連句ルネサンス」というコンセプトを掲げ、募吟形式を「二十韻」に決定した。今までの国民文化祭と違う新しさをアピールし、かつ省力化、省予算化を図ることがその判断の元になっていると聞いている。

「二十韻」は東明雅先生が昭和六十(一九八五)年に提唱された新しい連句形式で、歌仙を短縮化し短い時間で巻き上げることのできる二十句からなるもの。猫蓑会例会では以前から採用しており、猫蓑会員には手馴れた形式である。新形式が認知され、実作に用いられるまでには、時間がかかる。以前、明雅先生が「二十韻」が知られるのに十年かかった」と言われたが、この募吟で一挙に全国で実作が行われることになる。二十八年目の快挙といえるのではないだろうか。

次に「正式俳諧奉納」について。亀戸天神社は寛文二(一六六二)年に菅原道真公の御霊を守る太宰府天満宮から、天満大神を遷座した東国天満宮の宗社である。今年はその遷座から三百五十年の大祭にあたる。

猫蓑会が亀戸天神社に初めて連句を奉納したのは昭和六十二(一九八七)年。それ以来毎年四月に藤祭りに協賛して「正式俳諧」興行を行っ

## ●目次●

第百十九回例会明雅忌作品	源心丸巻	2
平成二十三〜二十四年度正式俳諧配役		5
芭蕉忌正式俳諧二十韻「ものふの」		6
新連句「二十韻」の提唱	東明雅	6
新形式「源心」の提唱	東明雅	8
温故知新 6: 俳諧・映画・物理学・夢分析		10
歌仙「菊酒や」インターネット時代	生田目常義	12
歌仙「葱坊主」出合いのパーワ	吉田酔山	13
連句を授業で……ミネソタから	室 房子	14
事務局たより		16

てきた。明雅先生は根津芦丈師からじきじきに伝授された正式俳諧の作法を大事にされ、正式俳諧興行の手引書を残されている。礼に始まり礼に終わる、連衆が心を合わせて一巻を巻き上げる、連歌・俳諧・現代連句につながる集団文芸の精神をあらわすものとして正式俳諧興行を位置づけておられた。それを学問の神様の天神様に奉納する機会を与えていただいた亀戸天神社に大いに感謝されていた。

今年は何より前向きな年にしたいと願っている方が多いのではないだろうか。今年、東明雅先生にご報告し喜んでいただけることが二件ある。まずは国民文化祭の募吟形式が「二十韻」に決まったこと、もうひとつは亀戸天神社の奉納「正式俳諧」が本殿で興行されることである。極めて異例のことだが、阿波踊り、藍染め、阿波人形芝居、第九合唱の四事業を正式開催種目とすること、県内自治体に事業を振り分けたいという条件下で徳島県が開催を引き受け、その他若干種目を公募することになった。今回は連句協会が文化庁に実施計画を添えて申請書を出し、開催が決定した。

従って、連句大会は主として徳島県連句協会が実施主体となり、徳島市は関与しない。徳島県連句協会は少ない予算で開催するに当たって

1・銀杏の座

源心「穂花や」

橘 文子 捌

穂芒や呆け極まれば光るなり

明雅 文子

かかる雲なし後の月澄む

美術展出品の絵を仕上げぬて

郁子

胡座の膝に猫の長々

ウ 静々と雪の舞殿青海波

碧

冬ぬくき場所君のポケット

思惑と誘ひが渦を巻いてゐる

鐵男

隅に一際控へ目の彼

江の島を西と東に分つ浜

則

往生の札貰ふ遊行寺

少年は野球練習夢中なり

郁

里山も消え原っぱも消え

発電の風車を回す花嵐

男

被災の地にも鶯を聞く

ナオ手足出すお玉じゃくしを觀察し

昭

血液型と遺伝子の妙

筋トシに密かに励む会社員

碧

寒卵立て願ふ佳きこと

七つ道具弁慶ならぬ櫛笄

碧

うしろからハグ甘くやはらか

溝が崩れた回らない螺子

同

月の縁尺蠖虫の面白く

男

めっちゃ旨いぞ西瓜・メロンも

郁

碧

ナウ 円高に大陸横断列車旅

復活祭を祝ふ人々

長老に先づは一献花の下

昭 文

衣くつろげ笑まふ蒼帝

男

連衆 東 郁子 松原 昭 松本 碧

伊藤 則子 林 鐵男

2・団栗の座

源心「残菊や」

吉田 醉山 捌

残菊や翁ゆかりの湯の匂ひ

明雅 醉山

月射す岩に子猿親猿

美術展百号の絵を描きぬて

良子

舷窓に聴くヴィオロンの曲

節子

ウ 木枯の電線仰ぐ大男

了齋

恵方詣にふたりお揃ひ

未悠

天災にかこつけてするプロポーズ

ポランティアして単位修得

齋

井戸掘りの技は先代譲りなり

崑崙の野に緑ひろがる

節

永遠に眠る木乃伊の空ろな眼

幾たび来てもまた迷ふ街

悠

伏す母に鏡に映る花を見せ

節

ナオ 早慶戦ボートレースへ応援歌

穴あけ工具好きな坊ちやま

悠

金色の鎖の先に雑種犬

三太郎日記伏せて藤椅子

齋

逢ひたれば汗にまみるる陽の盛り

節

年の差婚がはやるこの頃

いつまでも小さき位牌をいとほしみ

鋤鎌で有機農業

悠 齋

少しづつ氷柱の伸びる月の夜

千鳥の鳴きし方に海あり

良

ナウ 旅装解き蔵出し酒の酔心地

胸の隙間を抜けてゆく風

節

老歩荷の守りし花は山峡に

しゃぼん玉追ふこども等の声

山

連衆 本屋 良子 長坂 節子 鈴木 了齋

棚町 未悠

3・胡桃の座

源心「ねまるなり」

武井 雅子 捌

ねまるなり萩真盛りのみちのくに

明雅 雅子

山の端染める月仰ぐ宿

走り蕎麦伏流水で洗ふらん

佳之子

常連さんのさんざめき増し

ウ クリスマス誰彼となくハグをする

有子

雪女との幻の恋

掛軸の人艶やかに微笑みて

秀樹

孤高の画家の評価まちまち

南洋の暮しが板についてくる

柳

魔除けの像の乗ってゐる屋根

四七よな抜き音階なりし子守歌

有

被災地に向け送る励まし

柳

夢殿へ歩む小路も花の満ち

之

礼儀正しく遠足の列

樹

ナオやどかりの二匹になれば争へる

堂々と出すご飯三杯

高給の仕事あるよと香港へ

積木がらつと崩れ始める

寝静まる深夜の町に消防車

不倫ばれても知らぬ存ぜぬ

皇帝は黒き奴隷を溺愛し

樽酒軽く飲み干すといふ

月へ向けまつすぐに立つ御柱

団扇・箒は究極のエコ

ナウ郷愁のブルートレインラストラン

懐中時計父のお下り

花の雲歓声あがる本塁打

若駒撫でるやはらかき風

連衆 染谷佳之子 平林柳下 佐々木有子

青木秀樹

4・皂莢の座

源心「水の秋」

横山わこ 捌

水の秋昔深川橋いくつ

紅葉舟はや舳ひ解きたる

月の影ゆるゆる眠る嬰抱いて

飴玉ひとつ頬のふくらむ

里神楽笛と太鼓のいい調子

ダウンコートは彼とお揃ひ

金貸しに惚れた因果とあきらめた

研究室に増える歴史書

イタリヤと凱旋門のバスツアー

之

有

之

柳

之

樹

之

柳

有

之

樹

有

雅

有

明雅仏

わこ

恭子

淳子

忠史

芙美

史

美

恭

フオークとナイフやつと扱ふ

故郷の父への土産大吟醸

猫のびのびと昼の縁側

舞こみし花びら浴びて覚める夢

からんだ風のひもを引っぱり

ナオやつとこそ今年の蚕飼こんなもの

泣いて笑って続く円高

総裁の決意ばかりがからまはり

だるまストーブちよつとやけどす

罪作りほんの遊びがずぶずぶと

女神宣ふ子孫繁盛

国境知らずに鳥は行き来して

いつの間にやら市民権得る

ゼッケンの少し汚れて夏の月

あの肝だめしこを曲れば

ナウ線量計並んだ店も売切れに

ロトシックスにかけてみる運

あらまほし花とこしへのシャングリラ

柔らかき風土匂ふ頃

連衆 式田恭子 上月淳子 根津忠史

間瀬芙美

5・林檎の座

源心「風狂の旅」

鈴木美奈子 捌

風狂の旅始まるや竹の春

いざよふ月に小半の酒

秋鯖をほどよき色の浜焼に

遠くに見える島の灯台

ウ もの言はずじわじわ迫る寒気団

ひもがするりと角巻の中

かりそめのキスはさせせじと頑なに

広告ばかりたまるボックス

iPhone 徹夜で4S手に入れて

電気が来ないとんだ冷飯

お腹から笑ひ免疫力アップ

二百本安打来年に期す

監督の小さき娘は花盛り

かたまりあつて仔猫見る夢

ナオ 結論の出ないふらここ揺らしをり

除染の土をどこへ運ぶか

この川に棲む十億のざぎ虫よ

雪女郎には熱いタオルを

砕かれて融けてひとつに新枕

別れを告げる声のかそけき

円空仏相き鈍目に慈しみ

蒟蒻づくし大和路の店

短夜の月に仮眠の運転手

残業つづき止まぬ夏瘦

ナウ 孫のためシンガーミシン踏んでみせ

見分けのつかぬ政界の色

尋ねきて山かと紛ふ花の雲

同級生と囁すどんたく

連衆 小池啓子 高山鄭和 金子泉美

近藤守男

泉美

守男

和

守

泉

和

啓

守

泉

守

啓

和

同

奈

泉

守

啓

同

泉

守

泉

和

啓

平成二十三年十月十九日  
於 江東区芭蕉記念館

6・金柑の座

源心「風狂の」

高橋豊美 捌

風狂の旅始まるや竹の春

明雅仏

汽笛一声鐵路秋爽

豊美

この月を遠く眺むる人あらむ

央子

膝に遊べる猫をなでやる

吉文

ウ 革ジャンの裏に刺繍の鳳凰図

葵

へいへいへいと踊ろよベイビー

孝子

また逢ふと言つた指きりそれつきり

要子

美少年より菊姫に文

央

赤鞘でいざや傾かん仁左衛門

豊

御祝儀袋ぼんと十万

葵

ゴミ置き場何時の間にやら汚染され

文

レンタルビデオでゴジラ研究

要

監督の勝利に笑まふ花ふぶき

孝

のぼりくだりの競漕の波

豊

ナオ焼き具合何とも言へぬこの目刺し

央

メタボ中年見ないベトナム

文

田草取り軍靴に残る弾の痕

葵

黒い揚羽は天国の使者

孝

続かない尻取り遊び今の子の

要

淡々として母は傘寿に

央

里山に冬木の芽ぐむ散歩道

豊

寒月仰ぐ池の鴛鴦

葵

離婚した事情は岡目八目で

文

草食系ね次の男は

要

ナウ白ワインつまみは君の睦言よ

静かにドアをノック三回

奈良秘仏特別開帳花盛り

影籠なる鐘樓の屋根

連衆 遠藤央子 永田吉文 石川葵

坂本孝子 山本要子

孝 葵 文 央

7・梅擬の座

源心「色も香も」

生田目常義 捌

色も香も紫式部か小式部か

明雅仏

名残の月に映ゆる黒髪

常義

新絹の手ざはりもよく並べゐて

千町

出窓に置いた彫刻の犬

敬子

ウ 芸大を終へて三年過ぎしとか

志世子

郷里の池蓮根掘りをる

健

炬ばなしに狐狸を語りやり

町

騙した女数へきれずに

健

かんばんまでママを待つては残る奴

町

筑波の山に雄峰雌峰と

世

霊夢あり寺の建立思ひ立つ

町

髭を生やすと少し生意氣

敬

はんなりとおいでやすてふ花の宿

町

心澄ませば鐘霞む宵

敬

ナオ春の日の骨董市をぶらついて

健

鴉このごろめつきりと来ず

世

円高に仕事はみんな外国へ

健

お屠蘇が過ぎて取られたる足

町

初化粧裾まで雪の富士の山

敬

殿に見ゆる含羞の美姫

恨み状思ひ出せない人からで

パリで喋れば英語すらすら

じつくりとワイン冷やして夏の月

ナウ節電に慣れしも主婦は家事多く

老いて候すべて幻

先哲の白き館に花満ちて

発声練習うららソプラノ

連衆 原田千町 須賀敬子 秋山志世子

由井健

町 世 健 義 健 町 世 敬 世

8・通草の座

源心「俳諧の大橋」

西田一枝 捌

俳諧の大橋架り菊日和

明雅仏

新酒上出来盃にあふるる

一枝

玉環の二重に見ゆる何ならん

士郎

さよなら三角塾帰る子等

達子

ウ 邪魔な石よけて乱るる蟻の列

霞

草いきれする隅にあなたと

久美子

けざやかに紅を引いたる若衆ぶり

士

黄色い声とおひねりが飛ぶ

霞

富士講の回状が来たどうしよう

達

世界遺産に手を挙げる国

久

都市の川珍獣ひよいと現れて

士

ベンチャー社長背広似合はぬ

枝

ゆつくりと各駅停車花の旅

霞

四肢のびのびと憩ふ弥生野

久



新連句「二十韻」の提唱  
東明雅

昭和六十（一九八五）年三月一日発行

『季刊連句』第八号より転載

連句の諸形式

私は昭和三十六年、連句に手を染めて以来、頑強に歌仙形式を固執して来た。これは歌仙という形式を正統のものと考え、また、歌仙一卷満尾するのに、時間的にも不便がなかったからである。

また、歌仙形式は二折で、表六句（五句目月）裏十二句（八句目あたり月・十一句目花）、名残の表十二句（十一句目月）名残裏六句（五句目花）という、三十六句二花三月の形式であるが、表はおだやかに裏はそろそろおもしろく、名残の表にいたっておもしろさの限りを尽くし、名残の裏で静かに納めるといふ。この微妙な繰り返しと変化の相が私を魅惑していたのである。

これは連句の他の形式と比較してみると、歌仙の優越性はさらに明らかであろう。まず、百韻はいかにも冗長である。天和・貞享のころ、芭蕉らがこの冗長さに飽き足りず、句数を殆んど三分の一に縮め、歌仙形式を採用したのは当然で、その冗長さは一度実作してみられると、つくづくと実感できるところであろう。しかし、

その冗長と感ずるのは、我々が歌仙形式に馴れているからではなからうか。西鶴以前の俳諧師たちは、百韻を定められた不変のものとして、冗長とも思わず興行していたに違いない。

それは歌仙形式に馴れて、その魅力にとりつかれていた私たちにもあてはまるであろう。私たちは歌仙一卷を平均四時間、急ぐ時は三時間、あるいは二時間で巻き上げることでも度々である。私の捌いた最長の記録は一時間五分というもので、これには多くの証人がおられ、作品もさほど悪いものとは思わない。現代生活のいそがしき、あわただしさから、歌仙一卷を巻く時間が問題にされる時、私たちはさほど切実に感じなかった。しかし、考えてみると、初心の方、ことにこれから連句に入ろうとする方に取っては、歌仙は四時間どころか、それこそ一日がかりの難行苦行であることは推察がつくし、今後、連句が飛躍的に普及する為には、やはりこのように短くする配慮が必要であることが段々分かって来たのである。

歌仙で長ければ、その半分で終る半歌仙がある。私どももしばしば半歌仙を手がけて来たが、これはどうしても中途半端な感じである。表六句と裏十二句これでは、序と破の二段だけである。そして、機会を改めて、この先を続けると、何か冷えきった御馳走をたべるような索莫としたものがある。これは折角、前回の盛り上がった気分が冷えてしまっているからであろう。その他、歌仙より句数の多い五十韻・

第三十一回俳諧芭蕉忌 正式俳諧

俳諧連歌

脇起二十韻「もののふの」

もののふの大根苦きはなし哉

翁

時雨のおこす池のさゝ波

秀樹

写真展猫猫猫を並べぬて

千町

しばし憩へる長椅子の隅

良子

遠眺めスカイツリーに懸る月

郁子

添水の音のとなと抱きつく

央子

肌寒にかぼそき肩をいとほしみ

霞

銀かんざしを磨く鋳師

健

武蔵野の松の林を揺らす風

常義

山鳩の群急に飛び立つ

有子

ナオサスペンスドラマ脚本書き終へて

芙美

月に木刀振るふ汗だく

鐵男

留学生横顔うかぶ夏灯

志世子

議論のさなか不意に告白

泉美

幾つまで愛せませすかと文に問ふ

恭子

リフレインして教会の鐘

葵

ナウ日曜の朝のソウルの街しづか

鄭和

春帽の色選びあぐぬる

雅子

浅酌の夢見心地に花の舞ひ

孝子

ゆらりくともゆる陽炎

執筆

平成二十三年十月十九日 首尾

江東区芭蕉記念館に於いて興行

四十四・源氏（六十句）・八十八興（八十八句）・七十二候（七十二句）・長歌行（四十八句）は別として、古人の考えた短い形式として次のようなものが存在する。

- 1 二十八宿 二折（二十八句）  
表六句 五句目月 裏八句 七句目花  
名残表八句 七句目月 名残裏六句 五句目花
- 2 箴 二折（二十四句）  
表六句 五句目月 裏六句 五句目花  
名残表六句 五句目月 名残裏六句 五句目花
- 3 短歌行 二折（二十四句）  
表四句 三句目月 裏八句 七句目花  
名残表八句 七句目月 名残裏四句 三句目花
- 4 十八公 一折（十八句）  
表十句 九句目月 裏八句 七句目花
- 5 首尾 一折（十六句）  
表八句 七句目月 裏八句 七句目月
- 6 歌仙首尾 一折（十二句）  
表六句 五句目月 裏六句 五句目花
- 7 表合 一折（八句又は六句）  
百韻・歌仙の表のみ
- 8 三つ物 一折（三句）  
発句・脇・第三

右の1から8までのうち、歌仙に見られる繰り返しと変化のおもしろさ、これを十分に發揮でき、しかも句数が適当なものとすれば、1と3であるが、1は歌仙より短いとは言うものの、殆んど三十句に近い。これでは歌仙と五十歩百

歩の感を免れない。短歌行は箴と同じ二十四句だが、箴が表も裏も六句ずつでここに変化が見られないのに対して、表四、裏八の形式は変化が見られる。句数も二十四となれば歌仙の三分の二で、大分、短くなって来ている。

しかし、更に句数を減ずることができないかと考えた時、箴と短歌行を組み合わせれば、効果的であることに気が付いた。

### 新しい形式としての二十韻

次の表が、私の考えた新形式の二十韻である。

二十韻	（二十句）	（二花二月）
初折	表 四句	
	裏 六句	折立 月
名残の折	表 六句	五句目 月
	裏 四句	三句目 花

これだと、歌仙よりはずっと軽いが、半歌仙よりはやや重く、歌仙の重量感と複雑なおもしろみがある程度味わうことが出来る。

私はもともと、歌仙で最もおもしろいのは破の段で、しかも破一段・破二段と分かれている

ところに妙趣がこめられていると思つて来た。それに対して、序と急とは、必要ではあるけれども、それほど凝つたものを見せる必要はないのであつて、ことに序については、連衆の気分を鎮め、和をはかる効果は大きいけれども、発句と脇とは早速に手軽に運ぶべきだと思つている。芭蕉もこの考えだったことは、「発句と乞はば、秀拙を選ばず早く出すべき事なり。一夜のほど幾ばくかある。汝が発句に時をうつさば、今宵の会むなしからん。無風雅の至なり。余り無興に待る故、我発句をいたせり。正秀たちまち脇を賦す」とある有名な「去来抄」を読めば明らかであろう。第三は重い句なのでやや時間がかかるかも知れないが、四句目は軽い句がよいとされている程だから忽ち付くだろう。かつて私はこの『季刊連句』第三号で、歌仙一卷四時間説を唱え、表六句に三十分を配分したが、この二十韻の表四句は約二十分というところが標準であろう。裏六句と名残表六句には、それぞれ一時間ずつかけてゆつくり楽しみ、最後の名残裏にまた二十分かける。名残裏も、花の句と挙句とは、大体定まっているようなものであるから、さほど無理でもないとする、この二十韻一卷を首尾するには約二時間四十分位あれば一応できるのではあるまいか。

同じ『季刊連句』第三号で、草間時彦氏は「わたくしは連句は『一日がかりの遊び』と大悟徹底して、二時間や三時間の会でまとめようなどしないことにするか、さもなければ三時間でまとまる短い構成を別に考え、それを実作で試み

ることを提案したい」(同誌二頁『一日がかり』)と云っておられ、私もこの御意見には大筋の点で賛成である。それなればこそこの二十韻の新形式も考えたのであるが、この新しい形式を、ある会の席で、隣りにおられた草間氏にお話ししたら、実は偶然にも草間氏も二十韻を考え、すでに作っておられた由をお聞きして驚きまた嬉しくもあつた。ただ、草間氏の考えられたものは、総数は二十句であるが、四・十二・四と分けられていたそうである。だから、二十韻は私人が考案したものではないが、四・六・六・四と分けたところに特色があろう。

この二十韻は、式目その他、すべて歌仙に准じて興行される。ただ、表に月の座がないけれど、発句が秋の場合などは、遠慮なく引き上げて、すくなくとも、脇句か第三までに月を出すべきであろう。その場合は裏の折立の月が引き上げられたことになる。

歌仙の場合は一季表が嫌われるけれども、二十韻の場合は句数がすくないから、どうしても二季にしようとするれば無理が来る。それで、発句が春秋の場合には三句まで続けるのは当然として、特別の場合の外は春、秋を四句・五句続けず、四句目は原則として雑とするのが無難であろう。夏、冬も二句止まりであろう。

恋は裏か、名残の表に一箇所が適当であろうが、これも時と場合により、三句離れてさえおれば、二箇所出しても構わないと思う。

人情自他・場の続きも歌仙と全く同様であり、内、外の配慮が望ましいことも同じである。

さらに、季の句・雑の句をあまり片よらないように出すべきで、このあと、名残の裏五句目の月を雪にかえて、一年の景物を盛りこみ、この新形式の名称を雪月花と風流な名前にしようとする提案もあつた。たしかに、五十韻という先例はあるにしても、二十韻ではあまり風流な名称とは言えないだろう。それで、私もいろいろ考えているのだが、たとえば、この新形式をはじめて実作した場所に因んで、「万代」というおめでたい名も候補に上つた【編注…その二十韻「師走の町」の巻が、『季刊連句』の同号六頁に掲載されているので、併せて留書とともに左に転載】、あるいは四・六の形式から四六行、あるいは四六の墓に因んで、『筑波』というやさしい名も出るには出たが、『筑波』といえば、連歌の道全般を指すことになり、未だ決めかねている。さらに林富士馬氏考案の新形式六、十二、六は源氏第二十四巻に因んで胡蝶というやさしい名がつき、最近岡本春人氏によつて考えられた十八句の新形式は十八夜に因んで居待という、これもまた風雅な名が付けられている。二十韻でもよいのだが、お立ち合いの中にどなたかよい名前を付けて下さる方はないか。

二十韻 師走の町 東明雅 捌

ニコライの鐘も師走の旅籠町 十雨  
冬の紅葉のまだ朱き庭 明雅

ウ

伸子張る縮緬のしぼそのままに 和子  
熱き洗茶に憩ふ一時 徒司

月の窓倚りて眺むる虫送り 正江

厄日過ぎても続く暑き日 雨

茴香の実の香りよき海の紺 江

足をとられつ犬の綱ひく 和

留守番の婆に押しつけ置き薬 同

出戻り娘変へし髪型 江

ナオ

ぬめぬめと絹の靴下脱ぎすてて 雅

燃え尽きてまた燃え上がる恋 雨

重たげに外人墓地の夾竹桃 和

土用丑の日鰻丼の月 司

嘶家のいつも見なれしハンチング 江

キャッシュカードで出せぬ御祝儀 和

ナウ

辛口の飛驒の地酒の鬼殺し 雨

涅槃も末の頃の暖か 悦子

新連句発足祝ふ花の下 雅

五雲を望む万代の春 司

昭和五十九年十二月五日首尾  
於神田・旅館「万代」

連衆 国島十雨

式田和子

杉内徒司

秋元正江

古田悦子



岐阜の俳諧師国島十雨さんが、朝日カルチャー・センターの委嘱を受け、名古屋で連句の教室を持たれることになった。十雨さんとは旧い友達でもあるし、同じ朝日カルチャーの講師となられるからというので、杉内徒司さんの斡旋で、久々にお目にかかることになった。場所は神田の旅館「万代」で、ここは十雨さんの御親戚とのことであったが、震災・戦災をたえ抜いた建物の風格はすばらしかった。しかし、間もなく鉄筋の新しい建物に変わるといふ。

いろいろな話のあと、一卷を楽しむことになり、私がかねてひそかに考えていた新しい四・六・六・四の形式でいかかと申し出たところ、国島さんから快い賛同が得られ、私が捌くことになった。一時過から始まって、五時すぎに満尾したから、正味四時間は、歌仙とあまり時間的には差がなかったが、しかし、句数が半分近いから、それだけ密度の濃いものになり得ているのではないかと思う。

ともかく新しい連句形式としての二十韻、その第一作として、記念すべき作品である。



## 新形式「源心」の提唱

東 明 雅

平成六（一九九四）年三月一日発行

『季刊連句』第四十四号より転載

私が新しい連句形式として「二十韻」を考え、発表したのは昭和五十九年十二月のことであった。それから約十年、二十韻は忙しい現代生活にマッチした新しい形式として、多くの人に愛用され、ことに猫蓑では、たつぷり時間のある時は歌仙、二、三時間で首尾したい時は二十韻と、自ら使い分けるようになって、既に数々の名作も生まれ、いわば連句の世界にすっかり根をおろした格好になっている。

ただ、人間は贅沢なものだから、歌仙をやるだけの時間はないけれども、二十韻ではどうも物足りないという、具体的に言えば、歌仙は四時間以上かかるけれども、二十韻は二、三時間で終る。その中間、三時間以上、四時間以内の時間的余裕を十分堪能できる形式が欲しいというのも当然のことであろう。

そこで今回、考えたのが源心という二十八句のあとに示すような新形式である。

もともと、私の歌仙四時間説は季刊連句第三号に述べている通り、表六句に三十分、裏十二句に一時間半、名残の表も一時間半、そして、名残の裏に三十分、計四時間であったし、二十韻はこれも季刊連句第八号に述べているが表四

句は三十分、裏六句は一時間、名残の表一時間、名残の裏三十分、計二時間四十分の計算である。もちろん、この数は目標とし、理想とするもので、現実では必ずしもこの通りには参らぬであろうが、大体の目安としては妥当なものである。

その計算で、源心を考えると、この二十八句、表四句は三十分、裏十句は一時間半、名残の表十句も一時間半、そして名残の裏四句は三十分、計三時間四十分であり、三時間以上、四時間以内の時間的余裕があれば、まずまず可能な形式であるとさえよう。

考えてみれば二十八という数は、三十六（歌仙）と二十（二十韻）の丁度、真中の数である。昔から二十八宿という形式があつて、それは表六（五句目月）・裏八句（七句目花）・名残の表八句（七句目月）・名残の裏六句（五句目花）であるから、源心はこの二十八宿の一変形とも考えられるところである。

しかしながら、私が思うに、連句一卷のおもしろさは序・破・急とある中の破の段で、序（表）と急（名残の裏）はともに必要ではあるけれども、それほど凝ったものを出す必要はない。それより破一段（裏）と破二段（名残の表）に十分な句数と時間を割いた方がよいというのが、二十八宿から、敢て源心を考えたい根拠である。

因みに源心というこの名稱は、この形式をはじめて披露したのが、平成五年十一月二十四日、江戸川区行船公園の中の源心庵であったことに

由来する。この会では一座二十人、四卓に分けて、この新形式で興行したが、突然はじめての形式にもかかわらず、捌きも連衆も、何の惑いもなく、十一時から昼食を含め、四時前後にはめでたく首尾したのであった。次にかかげるのは当日の私の作品である。

冬紅葉

明雅 捌

潮入の池の波紋や冬紅葉

孝子

四温日和に集ふ連衆

美津

クリームを角の立つまで泡立てて

遊

画集の届く午后の宅配

和代

ウ 半月の兎は何処と子の問へる

庸子

踊終つて辿る野の路

明雅

新走り酔ひし脳裡に人の顔

孝

教へてくれぬ電話番号

庸

温故知新

6…俳諧・映画・物理学・夢分析

●日本の描写文化の基礎はモンタージュ

セルゲイ・エイゼンシュテイン  
N.Kaufman 著『Yapnskoje Kino』への後記(一九一九年)より

(前略) 日本映画には、会社も、俳優も、ストーリーも、みごとにそなわっている。が、しかし、日本

蚤の市アンティクジュエリーじゃらじゃらと

津

サンピエトロは鳩の遊び場

遊

日雇の男に夜は明け易く

孝

六神丸のほろ苦き味

代

踏みこみの畳のへりに花散りて

遊

庵主ひっそりかかげるふの中

庸

ナオくり返しテープで習ふ茶摘歌

代

研修旅行サロンバスにて

孝

雪しまく妙義山容黒々と

津

莧蕪農家かさむ借財

孝

賂は支店長より本店へ

遊

ちよつとお尻を触る上役

庸

羅に抱く命のあえかにて

遊

門を閉ざして籠る世阿弥忌

代

日本海月に漂ふ漁り舟

孝

稲架の形の変る峽ごと

津

ナウやうやくにメビウスの輪を抜け出して

遊

デル・デス・デム・デン覚えうららか  
花盛り空より笑ふ鬼瓦  
風船売りの道に一服  
代 雅 庸

平成五年十一月二十四日  
於 源心庵 首尾

源心 (二十八句) (二花二月)

初折 表 四句

裏 十句 折立 月

名残の折 表 十句 九句目 花

裏 四句 三句目 花

それである。

いずれの詩形も、いつてみれば、句に転化された象形文字であり、(中略)句の分析の方法は、表意文字の構造と、きわめてよく似ている。

表意文字は抽象的な概念を簡潔に銘記させるための手段を提供するが、この同じ方法が文学的な説明に写される場合、それは目ざす心像を表現するための同じような簡潔体を生みいだす。

この方法は、いくつかの象徴の簡素な組合せのなかに生ずる衝突に応用されると、抽象的な概念についての無味乾燥な解説におわる。しかし、この同じ方法がもしも、すでに形成されている言葉のいろいろ

るな組合せのもつ豊かさを發揮するように押しひろめて使われることになる、それは内容をますばかりでなく、写像派【編注…イマジズムのこと】の詩人に見られるようなすばらしい効果をあげることができるようになる。(中略)

表意文字の組合せによって形成された知的な概念のもつみごとに研ぎすまされた刃は、これらの詩において鈍つているとしても、しかもなお、情緒的な質において、これらの概念ははかり知れないほどみごとに花を咲かせたのである。われわれとして当然観察しなければならぬのは、ここでは感情が読者に向けられているという点である。なぜなら、ヨネ野口がいつているように「俳句の不完全を完全な芸術にするのは読者だ」からである。

【『映画の弁証法』セルゲイ・エイゼンシュテイン 佐々木能理男・訳 角川文庫(昭和二十八年刊)】

### ●連句の心理と夢の心理 寺田寅彦

「波柿」昭和六(一九三一)年七月号より

連句の付合いに關する心理的過程には普通文学における創作心理に比べてよほど特異なものがあるであろう、ということははじめから予期されることである。もしこれがしかるべき心理学者によって研究されればその結果はわれら連句の徒弟に対して興味があり有益であるというだけでなく、一般心理現象の中で他の場合にはあまり現われぬような特異な潜在的現象を追跡し研究するための一つの新しい道を啓示するような事にもなりはしないかと思われるのである。(中略)

このようにして、前句と後句とは言わばそれぞれが錯綜した網の二つの結び目のようなものである。

また、水上に浮かぶ二つの浮き草の花が水中に隠れた根によって連絡されているようなものである。(中略)一つの非常に精巧な機械の二つの部分が複雑きわまる隠れた仕掛けで連結して、その一方を動かすと他方が動きまた鳴りだすような関係である。それほどの必然さをもつて連結されていて、しかもその途中のつながりが深い暗い室の中に隠れているような感じを与えるものが連句の上乗なるものでありはしないかと思うのである。

これについて思い出すのは、近ごろの心理分析学者ことにフロイドの夢の心理に關する考察である。(中略)

フロイドの考えでは顕在的な「夢内容」の底には潜在的な「夢思想」なるものが流動している。前者の表面的な並列はいわゆる夢のような幻影の無意味な行列に過ぎないのであるが、これらの「夢内容」を形成する象形文字のような影像を一つ一つ「夢思想」の国のこれに相当する言葉に翻訳してみれば、それはちゃんとした文章となり、そうしてそれは驚くべくおそるべきわが内部生活の秘密を赤裸々に記述するものとなるのである。しかもその一つ一つの象形文字のような夢内容は驚くべく多様な夢思想の圧縮されたエッセンスであり、またはなほだしく複雑な夢思想の網目の接合点である。それらの接合点のうちでも、その人のその日の、その前日の、また生涯の経験——意識のないし無意識的——の最も多くを結びつけるに都合のいいような、そういう特別な接合点が、その夜の夢の内容の一つとして象形文字的に選ばれて現われてくるのである。(中略)

連句の一句の顕在的内容は、やはりその作者の非常に多数な体験のかなめである。そうしてその多くの潜在的思想の網が部分的に前句と後句に引っかけられているのである。もちろん前句には前句の作者

の潜在思想の網目がつながっているのであるが、付け句の作者の見たこの句にはまたこの付け句作者自身の潜在的な句想の網目につながるべき代表的記号が明瞭に現われているのである。そうしてまたこの二つの句を読む第三者がこの付け合わせを理解し評価しうるためにはこの第三者の潜在思想中で二句が完全に連結しなければならぬのである。しかもこの際読者の網目と前句作者の網目と付け句作者の網目とこの三つのものが最もよく必然的に重なりあい融け合う場合において、その付け合わせは最もすぐれた付け合わせとして感ぜられるのである。

このような機巧によって運ばれる連句の進行はたしかにフロイドの考えたような夢の進行に似ているのである。しかし夢の場合はそれが各個人に固有なものであつて必ずしもなんらの普遍性を持たなくてもよい。しかし連句においては甲の夢と乙の夢との共通点がまた読者の多数の夢に強く共鳴する点において立派な普遍性をもっており、そこに一般の鑑賞の目的物たる芸術としての要求が満足されているのである。

【『寺田寅彦随筆集 第三巻』岩波文庫】

解題●しばらく極端に古い方向に走つたので、今回は相対的に新しい(二十世紀前半)の、文学以外の専門分野を持つ人の言を聞いてみよう。セルゲイ・エイゼンシュテイン(一八九八—一九四八)は旧ソ連の映画監督。代表作「戦艦ポチョムキン」など。俳諧や歌舞伎をヒントにモニター・ジュ技法を開拓した。寺田寅彦(一八七八—一九三五)は物理学者、東京帝国大理科大学教授。随筆家、俳人。夏目漱石に私淑。連句を好み、自然科学者らしい独自の視点から、多彩な連句論を展開した。その映画論にはエイゼンシュテインからの影響もうかがわれる。(斎)

## インターネット時代 生田目常義

インターネットが日本でひそかに話題になり始めたのは一九九三年頃。今から十七年前。

パソコン通信、ワープロ通信という文字のやり取りをモデムという音声信号とデジタル信号を相互に変換する装置によってパソコンやワープロ間を普通電話回線で結んでの文字通信が盛んになり始めていた。なんとか画像をこのシステムで取り扱えないか、それによって新しいメディアを創設できないか、と多くの人が四苦八苦していた。ちょうど僕が連句に取りつかれるころである。それがワールドワイドウェブという通信ネットワークの整備、イリノイ大学でのモザイクという画像をも取り扱えるソフトの開発により、一九九八年頃には、パソコン通信は前時代のものとなってしまった。僕は傍観者だったが、この時代に連句をパソコン通信の世界に持ちこみ活躍された方々もいた。この世界はハンドルネームという仮名を使うため、実名はほとんど存じ上げない。今はみなさんどうしておられるやら。

木村ふうさんと二〇〇一年ころ、ふとしたはずみでネット上で知り合い、といつてもきつかけは連句の事柄であったと記憶している。知り合ってから半年くらいは世間話に終始していたが、恐る恐るメール連句にお誘いすると快諾していただいた。

神領の鎮まる闇や時鳥

木村ふう

大分の佐々木明氏との三吟で二〇〇二年六月の起首であったと記憶している。以来、九年にわたってメールの文音をお願いしてきた。

この巻はふうさんの企画による芭蕉賦物歌仙が二〇一〇年の大阪浪速の芭蕉祭で賞を得、その内祝いとしての一巻だったが、ふうさんのいろいろなさ事情により予想外に時間がかかった。芭蕉賦物歌仙は途中でいろいろと勉強せねばならない問題を抱えての歌仙であった。それに比べれば、この一巻は僕にとつてひたすら楽しいものであった。だが苦しい事情を抱えての木村さんの努力には、いくら敬意と感謝を表しても足りない気がする。

### 第二十六回国民文化祭・京都二〇一一年

連句の祭典募吟 京都府議会議長賞受賞作品

#### 歌仙「菊酒や」

両吟

菊酒やほんのちひさき祝ひ事

ふう

豊かに盛りて木の実いろいろ

常義

さらさらと月の溢るる湧き水に

はなしは続くおかみさんたち

ポケットに返し忘れた五十円

アルバイト先メロン出されて

ウ 炎天下母校健闘甲子園

大事にしまふけふの新聞

一九七〇年のこんにちは

あしたのジョーはあしただけのジョー

しなやかなナースの指が脈を取る

風鳴らす窓に昼月  
昨今は町近くまで熊出でて  
ブラフだけでは勝てぬボーカー

注文のサンドイッチはまだですか

鼓笛隊行く日照雨降る中

楚々と咲くうすくれないの花若木

赤児抱けば軟東風のごと

ナオふらこは静かに揺すれ山遥か

ふう  
常義

新幹線は陸奥の国まで

ほつとするページ真白の予定表

ブルサイドで頼むカクテル

指差して教へる南十字星

父知らぬ子の撫肩の痩せ

冬薔薇のやうなる恋を夢見つつ

継ぐ者の無き紙漉の技

有楽町西武デパート閉館に

借りたままなりあのとときの傘

いくつかの月の思ひ出胸に秘め

煙にむせて秋刀魚焼きをり

ナウ練り歩く時代祭の我が娘

黒毛の牛に車牽かせて

鼻歌のアンダルシアの野は広く

持つて生まれしデラシネの性

花万葉方丈の庵包みける

破れほつれて晩霜の笠

連衆 木村ふう 生田目常義

平成二十二年十月十七日起首

平成二十三年二月二日満尾 電子メール文音

出会いのパワー  
吉田酔山

国民文化祭受賞はまさに万馬券を引き当てたような気分。

応募用に作品の手持ちが無かったので、急遽池田やすこさんをお願いして図々しく池田邸で歌仙を巻くことにした。

連衆には増井智子さんを連れて来て貰った。智子さんは連句ではまだ日が浅いが俳句は達人。句会でいい句が出来たというので、発句に頂いた。

そうこうして三人で苦吟しているところへ注文しておいた弁当が届いた。届けに来たのは弁当店の店主。上品で若くモダンで美しくまばゆいばかりのご婦人、海老原雅子さん。

このお方不運なことにとんでもない輩のところへ弁当を届けてしまった。

せっかく来たのだから一句付けていきなさいと無理難題。初めてなので、と渋るところを強引に承諾させて一句付けて貰う。

スゴイ素晴らしい天才だ、などと持ち上げてさらにもう一句。ついでだから花の句も作つたらと、もうイジメに近い状態だったが、そこは大和なでしこ、「もうやるしかないですわねえ」としとやかな笑顔で短冊を差し出してくれた。

とてもいい花の句で、一同うっとり。てなこと、応募用紙を投函さえしてしまえば大手を振って歩ける。後は知ったことか、といった具合。

美女三人に囲まれての連句は最高であった。たぶん受賞は発句と花の句におんぶに抱っこだったと思う。

偶然の人と人との出会いのなせる技。連句本来の連衆相寄り心を通わせ一卷を巻き上げる。

知らぬ同士が連句で連帯感を醸成し打ち解ける。初心の方でも顔と顔を合わせていけば通じ合う。触れ合いがあったからこそその賜物と思う。

人と人の繋がりについて、かつて、郵政省は手紙がいちばんと言ひ、電電公社は電話がいちばんと言ひ、国鉄は会うのがいちばん、と宣伝していたが、こと連句においては国鉄に軍配を上げたい、と私は思った。

第二十六回国民文化祭・京都二〇一一年  
連句の祭典募吟 京都市会議長賞受賞作品

歌仙「葱坊主」

吉田酔山捌

影を濃く種となりゆく葱坊主 智子

春蚕の棚をよぎる朝風 酔山

永き日に銀のスプーン磨くらん やすこ

エプロン似あふ瘦身の人 智

男らの背に上弦のやはらかく 山

味見させられ買ひし甘栗 山

ウ 秋うらら中は僅かの貯金箱 智

エステ通ひは週に三回 山

頬と頬寄せて感触いい感じ 山

移り香連れて去りゆきし彼 智

原発の作業員みなごろ寝する 山

大漁旗の泥を洗濯

ワイキキでビール飲み干す月の下

母も娘もサンガラスかけ

起重機の音に震へる仔犬おて

葉巻くゆらす手作りの椅子

花の宴やと勝ちたる草野球

紙ふうせんの転がりてゆく

ナオひとり旅目当ては古き菜飯茶屋

阿蘇のやまなみ飽きもせず描き

巫女さんのつける高価な化粧水

跡継ぎ出来て喜びし親

合コンをレゲエの曲が盛り上げて

熊の毛皮が敷かれたる床

追ひ求め恋ひて焦がれて雪の精

甘きくちづけ胸の谷間に

MRI脳の縮みを指摘され

ネットで探すコンドロイチン

明けの月東司拭き込む修行僧

鬼の捨て子の細長き糸

ナウ時計台秒針の先小鳥来る

ロードマップにつける赤丸

磯近く平家末裔棲みつきて

ふかしまんぢゆう隣へのつと

雨粒のこぼれて揺るる花の房

唐墨磨れるさへづりの中

連衆 増井智子 池田やすこ 海老原雅子

平成二十三年四月二十九日首尾

於 保土ヶ谷 池田邸

## 連句を授業で…… ミネソタから

室 房子 文と写真



カレッジの日本庭園

「猫蓑通信」前々号で、アメリカのミネソタ州にあるコミュニティーカレッジの日本文化体験授業において連句を取り入れていることを紹介する機会をいただきました。今回は、授業の実際の進め方、学生の反応など、それに学生の編んだ六句構成の連句を三巻、紹介させていただきます。

雪と氷に包まれた一月に始まる春学期と違って、秋学期はまだ暑さの残る八月末から始まります。

幸いにもカレッジには日本人の設計した日本庭園があります。カレッジのサイト内の「Japanese Garden」をぜひ覗いてみてください。

<http://www.normandale.edu/JapaneseGarden/index.cfm>

この庭園を散策しながら俳句を作り、それを発句にと考え、一時間五十分授業四回（週一回の授業なので四週かかります）で連句を、と授業計画をたてました。

俳句は小中高のどこかで習ってきてはいますので、「HAIKU」という言葉にはなじみがあるのですが、一週目の授業では、ここでもう一度見直してもらいたいと、カレッジの図書館にあった「A Basho's footsteps: The Narrow Road to the Deep North (奥の細道: 芭蕉の足跡を辿る)」(by Films Media Group, Films for the Humanities and Sciences: Mico/NHK Enterprises 2006) という映像を使う事にしました。数カ国の方たちがバスで芭

蕉の旅程をたどり、俳句の心に触れ、俳句を編むというフィルムです。参加者とともに日本観光パンフレットにはあまり出てこない日本をバスでたどり、参加者が各々どのようなハイクモメントを感じ、どのように俳句と触れ合っているかを学生たちに見て欲しいと思いました。毎週書かせている感想カードによると、フィルムへの学生たちの感想は、「日本は美しい」「日本へますます行きたくなった」「俳句がセラピー的に使われていることは知らなかった」「ハイクモメントは自分の日常にあるのでわかる」「芭蕉って誰？」などといったものでした。

二週目は、まず先週の学生の質問に答え、芭蕉和歌、俳句、川柳、連句などを歴史を追って軽く説明し、ミネソタ季語集作りに入りました。「猫蓑通信」第八十四号でも触れましたように、これから学生が将来どこかで日本の文化に接する際に、季節ということを意識することで、日本人の生活、喜怒哀楽、そしてアートをいっそう深く理解できるのではないかと思ひ、ミネソタ季語に関してはたっぷり時間をかけたいと思ひました。ただ、時間をかけずぎるとだれてしまうので、その塩梅が塩味みたいに難しいんです。

クラスを五つのグループに分け、春、夏、秋、冬、そしてホリデーを割り振り、グループでおしゃべりさせました。その上で教室前の白板の各季節欄に書かせました。出ることで、白板が一杯になりました。ホリデーは冬の感謝祭からクリスマス、お正月あたりを考えていたのですが、説明不足のため、イースターから独立記念日まで入り、春夏秋冬となり重なってしまいました。冷暖房が整った生活の中で季節感がどのように現われるのか少し不安でしたが、学生たちが「楽しかった!」といい、山のように出た言葉を見て、季節を意識させるといふ本来



「猫蓑通信」前々号の記事にあるように、年齢、人種など多様なクラス構成。高校生も、イラク帰りの、子持ちもいる。子供の話は授業の後でしてくれる学生、仕事と学業を両立させている学生、皆現実と向き合ってたくましく生きている。

の目的は達したかなと思ひました。

さて、三週目は日本庭園に集合しました。日本庭園は手入れが命、その手入れを一手に引き受けているサムさんにお話を伺い、そのあと散策して俳句を作る授業にしました。インスタントですがお茶とお湯を用意しました。九月初めでしたが、もう風は冷たく、お茶をのんびりではなく体を温めるためにすすりながらの俳句作りとなりました。池に鯉がいるせいか、鯉に関する句が多かったです。

いよいよ四週目、締めくくりでもあり、目的でもある連句に入ります。先週の日本庭園での俳句を発句に使わせました。時間が五十分しかなく、連句というグループ行事が日本にはあるということを紹介するのが目的なので、楽しく連句作りの雰囲気味わってもらうということを第一にしました。ですか





クラス構成の多様さは、本人達にとっても教える側にとっても楽しい。教えるというより、私の文化と一緒に経験し、祝ってくれる仲間がいて嬉しい、という気持ち。年末最後の授業は、皆で年越し蕎麦を食べて締め括る予定。

かった経験を学生に伝えたい、経験してもらいたい一心で、連句経験のないに等しい私が無謀かとも思いましたが、共同作業で句を編んでいく珍しい文化季節感への心、そして楽しさを伝えたいという気持ちが、無謀かなという気持ちより強く、日本文化の紹介として連句を授業に取り入れました。学生たちの感想から、その目的は伝わったかと思いますが、作品を見ると日本庭園という場からあまり転じておらず、「付かず離れずの間をとりながら転じて進んでいく」ことの難しさがわかります。この点は私にとって「間」を考えると難しい次の課題です。先生をしていて楽しい事は、いつも学生の反応からそれまで気付かなかった事に気付かされ、自分自身が学んでいると感じる事です。写真を添えますので、私の学生たちを見ていただけたらとても嬉し

## 事務局だより

●第百十九回例会（芭蕉忌・明雅忌）が開催されました

十月十九日（水曜日）、江東区芭蕉記念館にて第百十九回猫蓑会例会が開催されました。第三十一回芭蕉忌正式俳諧を、はじめての立礼で興行し、続いて東明雅先生の発句による脇起源心の実作を九卓に分かれて行いました。当日の源心作品は今号のP2以下に、また正式俳諧はP6に掲載しています。

## ●今後の予定

・平成二十四年初懷紙（歌仙実作）  
一月十五日（日曜日）  
十二時～十七時（受付十一時より）  
於 ホテルフロラシオン青山

・藤祭正式俳諧稽古（お役の方のみ）  
平成二十四年三月頃  
於 亀戸天神社

・平成二十四年藤祭俳諧興行  
（亀戸天神社開基三百五十年祭）  
（正式俳諧興行 二十韻実作）  
四月二十五日頃  
於 亀戸天神社

## ●猫蓑基金にご協力ありがとうございます

・山寺たつみ様 平成二十三年十月 五千元  
・橘文字様 平成二十三年十月 一万元  
基金口座 みずほ銀行新宿新都心支店

猫蓑基金 普通預金 3376045

## ●訃報

・会員の梅田實様が、昨年十一月十五日にご逝去されました。つつしんでご冥福を祈ります。

## ●受賞

・第二十六回国民文化祭・京都二〇二一 連句大会  
京都府議会議長賞

歌仙「菊酒や」の巻

両吟（木村ふう・生田日常義）P12に掲載

京都市会議長賞

歌仙「葱坊主」の巻

吉田酔山 捌

P13に掲載

## ●新会員

・柴崎弘昌 東京都港区

・鈴木英雄 横浜市南区

・正田剛 東京都品川区

## ●転居

・式田恭子 東京都杉並区へ

## 季刊

『猫蓑通信』第八十六号  
平成二十四年一月十五日発行

猫蓑会刊

発行人 青木秀樹

〒182-0003

東京都調布市若葉町2-21-16

編集人 鈴木了斎

印刷所 印刷クリエイト株式会社

